

総合科学研究所だより

Research Institute of Integrated Sciences and Humanities

巻頭言

総合科学研究所主任 吉川 直志
YOSHIKAWA Tadashi

「温故知新」が大切です。温故知新とは「昔の物事を研究し吟味して、そこから新しい知識や見解を得ること。古きをたずねて新しきを知る。」と広辞苑にあります。「新しい」を求めるならば「古き」を良く知って初めてそこに手が届くことがあるということです。しかし、若いころにそのようなことが考えられたでしょうか。新しいものを追い求め、そのために先を急ぎ、古いものには目を向けない。これは私を含め、多くの人が経験したことでしょうか。しかし、急いで新しいものを追い求めると必ず壁にぶつかります。その時、壁を乗り越えて新しい一歩を踏み出すためのヒントが必ず過去にあるということを知りましょう。科学の研究もこうした古きを知ることで前に進んできました。まさに「三步進んで二歩下がる」です。学問は一つひとつ積み上げられていくため、土台を踏み固めて

行かなければ倒れてしまいます。

教育の方法も日進月歩です。現在、新たな教育の形として情報通信技術（ICT）機器を活用したICT教育が進められています。電子黒板、無線LAN、タブレット、クラウド、AIなど様々な機器や技術が教室に入ってくるようになりました。未来志向の教育です。生まれた時からスマートフォンがありPCの利用が当たり前の今の子どもたちにとって、ICT教育は必要不可欠となるでしょう。そこで急速に次世代を見越した教育が進められています。しかし、ここでも急いで新しいものを追い求めた時、きっと壁にぶつかるとでしょう。機器に使われる教育ではなく、機器を使いこなす教育が必要です。そのために、「温故知新」が大切になっています。

総合科学研究所の研究も古きを知って前に進む研究が進められています。このだよりでも報告されているように機関研究やプロジェクト研究は全て、正に昔のことを知って将来へつなげる研究となっています。これからも総合科学研究所は、過去と未来をつなぐ研究の場として機能し、温故知新により未来に向けた新しい科学研究を目指していきます。

平成29年度「開かれた地域貢献事業」報告

家政学部食物栄養学科：伊藤美穂子・片山直美・久保金弥・駒田格知・近藤貴子・田辺賢一・山田久美子・山中なつみ
文学部児童教育学科：倉田 梓・渋谷 寿・坪井眞里子・豊永洵子・堀 祥子・堀 由里・宮本桃英・村田あゆみ・吉川直志・吉田 文
短期大学部生活学科：武岡さおり・原田妙子・阪野朋子・松本貴志子・森屋裕治 短期大学部保育学科：河合玲子・児玉珠美・村松麻衣
名古屋女子大学同窓会「春光会」：齊藤朋子・清水里栄・千葉史子・松田尚美

本研究が推進する「開かれた地域貢献事業」として、地域の公共施設である名古屋市瑞穂児童館と名古屋市瑞穂保健所とのコラボレーション事業は11年目となり、平成29年度を無事終了しました。瑞穂児童館との交流事業は、保育・教育、栄養・生活関係で13の講座と、児童館クリスマスイベントで5つの企画を行いました。クリスマスイベントは地域の恒例行事となり、多くのご家族が楽しい休日をご過ごしました。瑞穂保健所との交流事業では、一般介護予防事業として「若返りきらきらセミナー」という愛称のもと、認知予防、運動、栄養、

口腔にわたるテーマで、6つの企画を行いました。講座では、瑞穂保健所健康ささえ隊による「みずほ体操」の実演も行われました。

これらはいずれも、春光会、文学部児童教育学科、家政学部食物栄養学科、短期大学部生活学科・保育学科の教員と学生の有志、および総合科学研究所の教職員が協力して実施し、多くの方にご参加いただきました。今後とも、地域の方々と触れ合う機会を多くご提供し楽しんでもらい、またこれらの事業に関わる学生たちが実体験を通じて成長する場面を多く提供すべく、取り組んでまいります。（文責：森屋裕治）

1 名古屋市瑞穂保健所との交流事業

平成29年10月～平成30年2月
平成29年度 一般介護予防事業
「若返りきらきらセミナー」

「オリジナルTシャツづくり」「絵手紙をかこう」「ストレッチ&エクササイズ」「よく噛んで健康寿命をのばそう」「味噌煮込みラーメンづくり」「懐かしい童謡や唱歌を歌いましょう」

2 名古屋市瑞穂児童館との交流事業

クリスマスイベント「第9回 みんなでメリー・クリスマス！」平成29年12月9日(土)・10日(日)
「クリスマスのオーナメントクッキー作り」「みんなでクリスマスを楽しみましょう」「クリスマスパーティーがはじまるよ/サンタさんとメリークリスマス」「クリスマスのペーパークラフトをつくろう！」「じしゃくであそぼう」

交流事業の各種講座 平成29年9月～平成30年3月

「木のスタンプづくり/ステンシルで旗づくり/絵本「モクレンおじさん」の友だちをつくろう」「サラサラ唾液で良い消化」「からだで、遊んでみよう！」「マザリーズ教室」「親子で運動遊びとコミュニケーション」「ちょっと変わったお絵描き遊び」「親子で楽しむ音楽あそび」「『プログラミン』でかんたんアニメーションを作ろう！」「愛知の味 味噌煮込みラーメンづくり」「木材を利用したおもちゃづくり」「1日の食事をつくってみよう！」「乳幼児の食育相談・子育て相談」「動くおもちゃづくり」



親子で楽しむ音楽あそび



クリスマスイベント じしゃくであそぼう



ストレッチ&エクササイズ



味噌煮込みラーメンづくり

機関研究

「創立者越原春子および女子教育に関する研究」

～女子教育の継承—戦前から戦後へ—

佐々木基裕(代)・河合玲子・遠山佳治・豊永洵子・藤巻裕昌・三宅元子・吉川直志・吉田文

本研究は平成28～30年度の3年を期間としており、本年度は2年目に当たります。越原春子先生の建学の精神、教育の理念を女子教育史の中に位置づける共同研究と、それを視野に入れた各メンバーの専門分野に基づいた個人研究の両面から、研究会を進めています。

共同研究においては昨年度に引き続き、『学園七〇年春風』（1985年）以降の学園の沿革をたどる作業として、関連教職員への

インタビューを行いました。これまでにやってきた学校情報の整理とあわせて、より精緻な女子教育史の叙述を目指しています。

個人研究に関しては、毎回2名ほどの担当者が、専門性に基づいた研究報告を行いました。戦前から戦後へ至る時期の教育界における女子教育の位置付けについて、教育学、歴史学、音楽学、体育学、社会学等の多様な観点を総合し、学際的な研究を進展させています。

(文責：佐々木基裕)

機関研究

「大学における効果的な授業法の研究7」

～学生が主体的に学修する力を身につけるための教育方法の開発～

遠山佳治(代)・市村由貴・佐々木基裕・渋谷 寿・白井靖敏・杉原央樹・竹内正裕・豊永洵子・羽澄直子・服部幹雄・原田妙子・野内友規・山田勝洋・三宅元子・吉川直志

本研究は、平成27年度から3年間かけて実施されるもので、平成13年度から研究所機関研究として継続されている「大学における効果的な授業法の研究」（1 情報教育、2 語学教育、3 教養教育、4 初年次教育、5 評価方法、6 学士力育成）の一環に位置づけられています。

研究1年目は、本学学生を対象に「主体的な学修および学習に関する調査」「大学での学びに関する調査」を行い、2年目はその調査結果をまとめるとともに、教育方法の開発に資する情報・資料

の収集を進めました。

最終年である今年度は、授業デザインや教授手法、カリキュラム・デザインの観点から、学生の主体的な学修のための具体的な教育方法について検討を重ねてきました。また、東京大学大学総合教育研究センターをはじめとする外部機関のFDワークショップにも積極的に参加し、実践的な知見も深めました。3年間の集大成となる本研究のまとめに向けて検討を進めています。

(文責：山田勝洋)

機関研究

「幼児の才能開発に関する研究」

～絵本の読み語り～

幼児保育研究グループ

今年度は、「豊かな言葉の獲得—絵本の読み語りを中心として」という主題で、前年度の成果と課題を踏まえて進めています。昨年に引き続き、絵本の世界を広げるために絵本を増やすと共に、絵本を媒体とした活動も展開しています。

3歳児では、1冊の絵本の読み聞かせから発展して、絵画表現につながる取り組みを行いました。4歳児は、「ともだちやシリーズ」の絵本を媒体にして、友達との関わりの中で子供たちが互いの気持ちに気付くような働きかけを意識しています。また、5歳児は、月刊絵本で取り上げられている領域「人間関係」の中から、

「気持ち」について皆で考え合い、子供同士で意見を交換し合っています。互いの関わりの中で、コミュニケーション能力の育ちに注目して取り組んでいます。

(文責：森岡とき子)



「絵本から生まれた、わたしのワンピース」

機関研究

「食と健康に関する研究」

駒田格知(代)・久保金弥・山中なつみ・小椋郁夫・高橋哲也・田辺賢一・山田久美子・伊藤美穂子

本研究は「食を食べること」と「栄養・健康」との関連を多方面から幅広く研究し、それらを統合して学外に広く情報発信していくことを目的として本年度から研究を開始しています。今年度は、特に栄養確保の入り口である「咀嚼」をキーワードとして、解剖学、栄養学、食品学など様々な分野からの視点を加えた小学校向けの食育冊子の発行に向けて活動しています。これまでに、現行の食育指

導状況を探るため、使用教材や文献の収集、指導教員（栄養教諭）への聞き取り等を行って情報収集に努めてきました。

来年度はこれらの情報を統括し、分野ごとに専門性を活かした執筆を行っていく予定です。同時に各研究員が専門領域の研究も進行中であり、今後も本研究に展開していく予定です。

(文責：伊藤美穂子)

プロジェクト研究

「新教育課程に向けた音楽カリキュラム構築と教育法の確立」

稲木真司(代)・佐々木基裕

学習指導要領はこれまでおよそ10年おきに改訂されてきましたが、ついに今年の3月に新しい学習指導要領が公示されて、6月には学習指導要領の解説も公示されました。本研究では、現場において音楽を教える教師にとって必要となる音楽の内容を論理的に系統立てて、容易な内容から段階的に難しい内容へと連続的に教える方法を明らかにしていくための研究を行ってきました。昨年の夏に国

際コダゲー協会の国際シンポジウムがカナダのアルバータ大学で開催され、世界各国の音楽教育者が集まり様々な研究発表が行われました。それをふまえて、日本において求められている、これからの音楽教育の実践例について現在研究をまとめています。新しい指導要領に示されている音楽教育の方向性が明らかになってきました。

(文責：稲木真司)

プロジェクト研究

「子どもの表現と創造性を育むアート教育の指導法の開発」

これまでの研究内容をまとめ、12月22日に中間報告会を行いました。その折、岡山県立大学の吉永早苗教授を講師にお招きして、特別講演会を行いました。吉永先生は、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の改訂（改定）および教職課程コアカリキュラム・モデルカリキュラムにおける幼児教育・保育について、約1時間の講演をして下さいました。主体的・対話的で深い学びに取り組む保育現場や、保育者養成課程での工夫を凝

松田ほなみ代・伊藤理絵・河合玲子・神崎奈奈・白石朝子・山本麻美らした教授内容について拝聴でき、大変参考になりました。中間報告では、造形表現と音楽表現で取り組んだ共通課題と、それに対する学生の回答を分析し、適切な子ども理解を踏まえた表現の指導ができる、保育者の養成について検討する必要性を述べました。報告内容について、吉永先生にもご助言をいただき、今後の研究について示唆を与えて頂く貴重な機会となりました。

（文責：松田ほなみ）

プロジェクト研究

「子どもの主体性を尊重した保育実践の研究Ⅲ」

本研究は、保育者が記述した保育エピソードを様々な視点から分析すること、及び乳児をもつ母親に対するインタビューによって得た養育エピソードに対する分析をすることを通して、乳幼児及び保育者・養育者の主体性について研究を進めてきています。

今年度は、新たに追加収集した保育エピソードを、保育場面や乳幼児の年齢により分類し、保育者一乳幼児間に見られる相互関係をエピソード別に分析したうえで、本学学生が、現場での乳幼児理解、保育者の保育行動及び意図などについて学ぶ教材として事例集

吉村智恵子代・荒川志津代・宮本桃英・小泉敦子・堀 由里・安田華子「保育のあるある！ 事例集」を作成しました。試作段階では、部分的に授業等で使用し、学生が保育エピソードを通して深めた考察から有効性を確認することもできました。

また、母親の主体性については、昨年度に続いてインタビュー調査の結果を属性に応じてグループ化し、新たな分析を加えることにより、子育て中の母親の心理的変化のモデル化を試みることができました。

（文責：吉村智恵子）

平成30年度プロジェクト研究

「子どもの表現と創造性を育む
アート教育の指導法の開発Ⅱ」

松田ほなみ代・伊藤理絵・河合玲子・神崎奈奈・白石朝子・山本麻美

平成29年度は、保育者養成において、5領域の一つである「表現」の指導法に関する教授法について、プロジェクト研究として、従来の「美術」「音楽」という教科の垣根を越えたアート教育を目指し研究を行って来ました。音楽・美術の専門教員だけでなく、子ども学・心理学の専門教員を加えた研究グループにより、多角的な視野で研究を進めることが出来ました。平成30年度はさらに実践を進め、教育効果を分析し、感性豊かな子どもを育む、保育者養成プログラムの開発を目指したいと考えます。

（文責：松田ほなみ）

「一汁一菜の献立に関する栄養学的分析と
持続可能な食生活へのアプローチ」

阪野朋子代・瀧日滋野

家庭科教育では、一汁三菜の献立を栄養バランスが整う食事の基本形として指導されています。近年、家庭における調理時間は短縮傾向にあることから、料理研究家により、一汁一菜の献立で栄養バランスをとることが提案されました。高校生に一汁三菜と一汁一菜の献立作成を行わせるところ、一汁一菜の方が続けて実践できるが栄養バランスは整えにくいと認識されました。本研究では、一汁一菜の献立に関して栄養学的分析を行います。一汁一菜の献立作成の留意点を明らかにし、家庭内の調理負担の緩和や家庭内調理の向上を目指します。

（文責：阪野朋子）

「近代日本における音楽教育の変遷をふまえた
今の日本に必要な音楽・音感教育のあり方」

稲木真司代・佐々木基裕

現在の日本の音楽教育は、一般的に1868年の明治維新から始まったという認識がされていますが、実は1853年のペリー来航によって開国を迫られた幕府は1859年に横浜を開港し、それ以降横浜で布教活動を行っていたキリスト教宣教師たちによって西洋音楽の教育がなされていたのでした。わらべうたや民謡などの日本の伝統音楽にしかなじみのなかった当時の日本人たちは、宣教師たちの教える賛美歌にある西洋音階のメロディーを正しく歌えなかったそうです。それ以来、日本において音楽を教えるために様々な方法や教授法が取り入れられてきましたが、現在の音楽教育は今の日本に本当に必要なものとなっているのでしょうか。この研究では歴史的な背景をふまえて、現在の日本に必要な音楽・音感教育を提えていきます。

（文責：稲木真司）

「幼児教育の5領域を主題とする
「つくる、たべる、おしゃべりする」対話型
ワークショップデザインの実践的研究」

堀 祥子代・村田あゆみ・阪野朋子

本研究は、幼児教育における5領域（健康・人間関係・環境・言葉・表現）を主題としたワークショップを通して、現代社会における暮らしを見つめなおし、生きる力の源泉となる知恵を共有、地域で主体的に人間および生活を豊かにする場を形成することを目的とした実践的研究です。地域の親子中心に参加者を募り、「つくる、たべる、おしゃべりする」行為を相互的に実践する中で「人間の生活における本当の豊かさとは」と問いかけ、共に対話し、考えていきます。（文責：堀 祥子）

総合科学研究所主催 平成29年度大学講演会（平成30年2月9日）

「モチベーションの理論と授業への応用」

講師：佐藤浩章氏（大阪大学准教授）

日々の授業において、「学生は積極的に取り組んでいるのだろうか?」「学生にとって魅力的なものになっているのだろうか?」という疑問を感じています。今回の講演では、学生の授業で学ぶ動機についてのモチベーション理論に基づいた授業のあり方をお話し頂きました。会場に応じたアクティブラーニングによる講演となり、個々に自分の授業で学生のモチベーションを高めることを理論と照らして考える貴重な時間となりました。「教師は学習者の動機づけはできない。動機づけできるのは学習者だけである」ということから、学生が自ら学ぶモチベーションを持つ機会を作り、授業でそのモチベーションを高めて持続させるためには、今回、講演して頂いたモチベーション理論を知った上での授業デザインの大切さを知ることになりました。日々の授業で感じているもやもやした思いがはっきりしました。この講演をきっかけに、大学の授業がより良いものになって行くことを期待しています。

(文責：吉川直志)



平成29年度 大学講演会

総合科学研究所「開かれた地域貢献事業」に参加して

瑞穂保健所との交流事業「若返りきらきらセミナー」
「作ってみよう♪ オリジナルTシャツ」

最初は、うまく教えられるか不安でしたが、いざ始めてみると、みなさんがとても楽しそうで、Tシャツのデザインを一緒に考えているうちに、私自身も楽しんでいました。また、人生の先輩として色々なお話をしてくださり、とても有意義な時間を過ごすことが出来ました。完成したTシャツを披露している皆さんがとても嬉しそうで、やりがいを感じました。また、このような機会があれば、お手伝いしたいと思いました。

短期大学部生活学科1年



オリジナルTシャツづくり

瑞穂児童館との交流事業
「からだで、遊んでみよう!」

2歳～小学校低学年までを対象に、動物や植物を想像して身体を使って表現する活動に参加しました。年齢に応じて表現の仕方が様々で、年齢が高くなればより具体的に表現できるようになっている様子は一緒に活動を行う中で、とても興味深かったです。活動を終えた後は子どもたちと仲良くなれました。また、機会があれば参加してみたいと思いました。

文学部児童教育学科4年



からだで、遊んでみよう!

今年度運営委員

委員長

森屋 裕治
MORIYA Yuji
(短期大学部)伊藤 充子
ITO Mitsuko
(文学部)河合 玲子
KAWAI Reiko
(短期大学部)羽澄 直子
HAZUMI Naoko
(文学部)山田 久美子
YAMADA Kumiko
(家政学部)

研究所メンバー

所長

渋谷 寿
SHIBUYA Hisashi

顧問

河村 瑞江
KAWAMURA Mizue

主任

吉川 直志
YOSHIKAWA Tadashi

教授

越原 一郎
KOSHIHARA Ichiro

職員

寺島 まり子
TERASHIMA Mariko

職員

牧野 弘実
MAKINO Hiromi

編集後記

ここに総合科学研究所だより第26号をお届けします。ご執筆頂きました関係者の皆様に感謝申し上げます。本年度の地域貢献事業はこれまでで講座の回数が最も多くなり、より多くの先生方のご協力の元、好評のうちに終えることができました。今年度の活動が来年度につながり、より盛り上がるものとなっていくでしょう。大学講演会では大学での授業の方法について深く考える機会となりました。この号において1年間の研究所の成果・活動の一端を垣間見ることができたと思います。未来に向けて、一步一步進んでいける活動となるよう、今後ともご協力をお願いいたします。(文責：吉川直志)